

「男、突っ走る！」

第79回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

鬼橋頭岡	長河熊花石大佐富山前藤野	阿橋田山国	木木	木	
	野辺瀬木井坂藤永森川田倉	川崎所中枝	内内	内	
翔直子政	優真怜 麗美麻 直啓昇浩	武 俊敦 佐代子	健次郎	真保	雅也
(73)	(17) (21) (17) (23) (24) (16) (21) (22) (18) (29) (21) (21)	(37) (48) (62) (43) (58)	(19)	(50)	(23)
舞台俳優 舞台女優	『スリジエネ』メンバー	振付師 WEB会社社長	市民映画プロデューサー	劇団主宰者 市民映画プロデューサー	『オフィスツリーイン』代表
	『スリジエネ』メンバー			雅也の母	
	『スリジエネ』メンバー			雅也の弟	

1 南公民館・全景

2 同・廊下

ベンチで横になって休んでいる雅也――
――ゆっくりと目を覚まし、慌てて体を
起こす。

付き添っている山中が気づいて、

山中「おお、起きたか」

雅也「あれ……」

山中「ダンスレッスンの途中で、いきなり倒
れたんだぞ」

雅也「ああ……そうでした……。みんなは……」

……？」

山中「タケさんのダンス稽古やってるよ」

雅也「……」

山中「いろいろ無理が重なったんじゃないの
か」

雅也「……」

山中「確か今、地元のフリーペーパーも制作
して、『七夕物語』の販売パンフレットも

作ってるだろ。それに、他にも事務仕事とかいろいろあったら、時間がいくらあっても足りないか」

雅也「まあ……」

山中「今、『スリジェネ』のタスク、他に何抱えてる？」

雅也「まだ手を付けてはいませんが、『七夕物語』の告知チラシの制作と、来場者全員配布する当日パンフレットの制作があります」

山中「そっか。その二つ、俺が作る」

雅也「ヤマさんが？」

山中「俺だって、長年舞台やってきて、当日パンフレットや告知チラシは自分で作ってきたんだ」

雅也「でも、広報物の制作は僕が担当することに……」

山中「確かにうちーは、『スリジェネ』の運営でもある。でも今は、『スリジェネ』のメンバーであり、『七夕物語』のキャス

トの一人。キャストである以上、まずは作品に出演することを優先する。もしここで、うちーの体調が悪化して降板にでもなったらどうする？ 代役の人の負担もあるし、何より他のメンバーがどう思う？

雅也「……」

山中「うちーが最優先すべきことは、何より一日も早く演技やダンスや歌を叩き込んで、出演者としてみんなと一緒にステージに立つことだ」

雅也「……」

山中「制作物の件は、俺から国枝さんに話したく。これ以上、うちーに負担を与えちゃダメだ」

雅也「ヤマさん……」

山中「アサミンが国枝さんに連絡してくれたんだけど、何でも他の用事があって今日はこっちに来れないそうだ。いくら他の用事があるって言っても、プロデューサーなら合間を見てメンバーの様子を見に来てもら

わないとな。それに、うちーの負担も考
えずに、あれもこれもって指示して、ちよ
つと無責任なところあるよな、あの人」

雅也「……」

山中「（苦笑して）ああ、悪い。うちーに
とっては、前から仕事を一緒にしてる人だ
もんな。忘れてくれ」

雅也「いえ……」

と、会議室のドアが開き、麻美が出てくる。

麻美「うちー、大丈夫？」

雅也「ごめんね、アサミン。心配かけて」

麻美「ううん。（と山中に）これから一時間
休憩です」

山中「分かった、ありがとう」

と、浩太、茜、美央が出てくる。

茜「うちー、気が付いた」

浩太「さっきより顔色良くなったな。血色悪

かったぞ」

雅也「そんなひどかった？」

浩太「ああ」

美央「私たち、今からコンビニ行くの。うちちーも一緒に行こうよ。外の空気も吸わないと」

雅也「うん」

山中「行つといで、うちー」

雅也「はい。お騒がせしました」

3 コンビニ・駐車場

菓子パンを食べながら話している雅也、

浩太、麻美、茜、美央。

雅也「学生時代の時は、ちよつといろんなタ

スクが重なっても全然平気だったのになあ」

茜「学生時代からいろいろやってたの？」

雅也「学園祭の企画二つ掛け持ちしたり、新

入生歓迎会の企画やったり、自主ドラマ作

ったり、連載小説書いたり……。やっぱり、

学生とはもう違うんだね」

浩太「まあ、企画して作るのと、舞台に立つ

ことは違うしね」

雅也「それはあるか。元々運動神経が悪い俺

が、全身を使ってミュージカルに出演するのが、そもそも挑戦的過ぎたのかもしれないし」

美央「うっちー、初めてなんでしょ、舞台立つの？」

雅也「うん。最後に舞台に立ったのは、小学校の学芸会かな。だから、もう十一年前」

美央「私、五歳だわ」

雅也「美央って、何年生まれ？」

美央「私？ 二〇〇二年」

雅也「ちょうど小学校入学した時だわ。『ス

リジェネ』のメンバー、同年代だと思った

けど、こういう話聞くと、年の差感じる」

茜「私やコウタはアサミンは、同年代になる

もんね」

浩太「俺とアサミンが、うっちーの二個下で、とみーがうっちーの一個下か」

雅也「同じ学校に、こんな後輩たちがいたら心強いわ。というか、全然後輩なんて思えない。みんな、しっかりしてるもん」

麻美「そんなことないよ。私なんて、まだまだ世間のことを知らない大学生だし」

茜「私も」

浩太「俺も、派遣で製造業手伝ってるけど、特に気にしたことないわ」

美央「私、大学どうしようかな」

雅也「美央はまだ高校一年生でしょ。進路のことは、慌てずにこれから考えれば良いんだよ。俺なんてね、高校一年生の時、まさか自分が舞台に立つなんて思わなかったもん。人生ってね、何が起きるか分からないものなんだなって実感してる」

茜「私だって、ダメ元でオーディション受けたから、まさか自分が受かるなんて思わなかったもん」

雅也「当初の台本では、男女六人の予定だったの。でも、せっかくオーディションに来てくれたからっていう理由で、国枝さんが全員合格にしたの」

麻美「そうだったんだ」

雅也「だから、サクラでオーディション受けた俺も含まれてるとは思ってもいなくてね。しかも、運営とキャストのパイプ役を兼ねたメンバーリーダーまでやることになって。俺なんかで良かったのかなって、今でも思ってるもん。アサミンが副リーダーっていうのは、納得できるけどさ」

麻美「そんなことないよ。うちーって、包容力あるって友達に言われたことない？」

雅也「まあ、専門学校の時の友達には、誉め言葉で天然人たらしって言われたことはある」

麻美「だから、うちーにはそういうポジションョンが向いてるんだよ。リーダーってさ、実力とか技術とかよりも、みんなに安心感を与えるほうが大事だって私は思うもん」

雅也「（苦笑して）安心感与えるべき人が、稽古中に倒れちゃダメだよね」

茜「もう大丈夫なの？」

雅也「うん。ちよっと休んだら、楽になった。」

夕方からの稽古は合流するから」

浩太「無理するなよ」

雅也「うん。けど、遅れた分は取り戻さなきゃね。俺にとっては、一回一回の稽古が貴重な時間だから」

4 南公民館・大会議室

雅也と浩太が稽古をしている——山中が演出をつけながら演技指導をしている。

台本を見ながら、その様子を見ている

——昇平、啓司、直海、茜、麻美、美

央、麗子、忍、怜奈、真理恵、優美、

阿川。

N「市民ミュージカルの稽古は、どんどんと進んでいきました。何とか自分のセリフは頭に入れ、随所でヤマさんが演技指導や演出をつけてくださいました」

5 中央公民館・全景

N 「それからしばらくして、別の舞台公演を終えた橋岡さんや、物語のエピローグとプロローグにのみ出演することになったベテラン女優の方も合流し、通し稽古も目前となりました」

6 同・和室

雅也、浩太、平、啓司、直海、茜、麻美、美央、麗子、忍、怜奈、真理恵、優美、橋岡、阿川が集まっている――
山中が女優・鬼頭翔子（73）を紹介している。

山中「今日から稽古に合流する鬼頭翔子さんです」

翔子「鬼頭翔子です。こんな若い皆さんと一緒に舞台上に立てること、嬉しく思います。よろしく願います」

一同「よろしく願います」

× × ×

翔子、麻美、忍が稽古をしており、一

同その様子を見ている。

N 「稽古初参加の翔子さんの演技に、僕は圧倒されてしまいました。これが演じるということなのかと、僕は改めて実感していました」

7 南公民館・大会議室

通し稽古をしている雅也、浩太、平、啓司、直海、茜、麻美、美央、麗子、忍、怜奈、真理恵、優美、橋岡、翔子——演出席で見ている山中。その隣で稽古を見ている国枝、本村、田所、橋崎、阿川。

N 「七月に入って間もなく、ついに通し稽古が始まりました。初回の通し稽古には、プロデューサーである国枝さんや、その他運営陣が見学に訪れていました」

× × ×

稽古終了後——山中の周囲に集まっているメンバーたち。

山中が、メンバーたちにダメ出しをしている。

N「通し稽古が終わると、演出のヤマさんからのダメ出しの時間となりました。そのダメ出しの部分を直すために、該当シーンの稽古を重ね、その繰り返しをしていき、少しずつ作品のブラッシュアップをしていきました」

8 居酒屋（夜）

N「ある日の稽古終わり、僕ら男性陣は初めて食事会をしました」

雅也、山中、浩太、昇平、啓司が食事をしている。

山中「ああ、圧倒的に稽古回数が足りないな。時間があれば、もっと良いものにできるんだけどな」

雅也「日曜日の週一回ですからね。そりゃ、ちゃんとした劇団なら、いくらでも時間はあると思いますけど、みんな仕事やら学校

がありますし、とてもじゃないけどそんなにもできないですもんね」

昇平「平日の夜とか、できないんですか？

正直、このまま本番迎えられるのか、不安です」

雅也「経験者のシヨウからしたら、やっぱりそう思うんだ。俺は、とにかく初めてだから不安なことばかりで、稽古回数が少ないとかそういう具体的なことは分かんなくて」

浩太「まあ俺も、できるならまた個人稽古がしたいっていうのがあるかな」

雅也「個人稽古か……」

浩太「稽古始まってすぐに、うちーとヤマさんと三人で、二人だけの場面の稽古やっただじゃん。あれがあったから、良くなった気がするんだよ」

雅也「それは、俺も思う」

啓司「練習時間があればあるほど、それに越したことはないけどね」

山中「全力で臨むことは大事だけど、今のままだと正直、何とか人前で見せれる形にはなるけど、学芸会レベルで終わっちゃう気がするんだよな」

雅也「……」

山中「マイク問題は、何とか必要なくなったから良いけど」

昇平「何ですか、マイク問題って？」

山中「声が小さいメンバーは、状況によってはピンマイク使おうかなとも思ったんだよ」

昇平「全員じゃなくて、一部にピンマイクなんて使ってたなら、声の反響的に違和感ありますよね」

山中「そうなんだよ。でも、声が届かないことを考えたら、そうしようかと思ったことはあった」

雅也「間違いなく、僕は入ってますよね」

山中「まあな。でも、うちー大分声がでるようになったな」

雅也「本当ですか？」

昇平「それは俺も思います」

雅也「シヨウに言われると嬉しいね。はっしーさんもそうだけど、やっぱり舞台経験の人は、根本的に声の出し方が違うもんね」

浩太「確かに。俺も、まだ映像の演技になっちゃうときがある。舞台だから、舞台よりの演技をしなきゃとは思ってるんだけど」

雅也「役柄のこともあるけど、クールな人って大きい声出せないじゃん。でも、ちゃんと響く声出してるから、シヨウってすげえなってるもん」

昇平「そんなことないって」

山中「そうだぞ、うちー。シヨウは、あまり褒めると調子に乗るから」

昇平「ちよつとヤマさん」

啓司「でも、俺も上手いと思ってるよ」

山中「マイキーは、もう少し演技に抑揚をつけられると良いな。セリフを言うことに必死になって、動きがぎこちなくなってるかきがある。セリフ覚えるのに必死になるか

ら、いざつてときにセリフが飛ぶんだよ」

雅也「セリフが飛ぶなんて、考えるだけでも
ゾツとします」

山中「もしセリフが飛んだら、そこは何とか
アドリブでごまかすんだな」

雅也「アドリブですか？」

山中「どんだけ稽古重ねても、本番一回を見
に来るお客さんは、台本を見ながら芝居を
見てるわけじゃないから、内々のキャスト
やスタッフじゃない限り、どこのセリフを
間違えたとか飛んだとかなんて分からない
んだ。間違えたり飛んだりしたことを分か
らせないように乗り切るのも、まあ技術の
一つだろうな」

雅也「そんなことできるんですか？」

山中「昔、セリフが飛んじやったことがあつ
て、そうやって乗り越えたよ」

雅也「すごいですね……」

山中「場数だけはたくさん踏んでるからな。
みんなも、いろんな経験をしてくんだな。」

シヨウなんか、演劇一本だったけど、今回はミュージカルで歌もダンスも覚えただろ。それだって一つの経験だ」

昇平「そうですね。演じてて思うのは、やっぱり演劇のほうが良いってことですね」

雅也「やっぱり、演劇とミュージカルじゃ違う？」

昇平「全然違うよ。歌も踊りもなく、芝居一本で一つの作品を表現するんだから」

浩太「俺は良い勉強になったと思ってる。そりゃ、シヨウみたいにはならないと思うけどさ」

啓司「俺も、まだまだ実力不足だったことを実感してる」

雅也「俺はずっと脚本だったりスタッフだったり、裏方しかやってこなかったでしょ。だから今回、演じる側の大変さを実感してる。まあ、みんなと一緒に無事に本番を迎えられれば、言うことはない」

浩太「やっぱりリーダーは全体のこと考えて

るんだ」

雅也「当たり前前じゃん。俺はね、運営陣に言えないような相談だったり、パイプ役を兼ねてメンバーになったんだもん。運営陣もメンバーも円滑に本番を迎えられるように調整するのが、言わば俺の役目だって思ってるんだから」

山中「うちーがそういうつもりでいてくれるから、みんなも安心して稽古に参加できるんだ。これからも頼んだぞ」

雅也「はいッ」

9 木内家・全景（数日後）

10 同・雅也の部屋

音楽を流しながら、ダンスの練習をしている雅也——と、玄関のドアの開閉音が聞こえ、真保の声が聞こえる。

真保の声「ただいま」

11 同・居間

雅也が階段を下りてくる——真保が入ってくる。

雅也「おかえり」

真保「ただいま」

雅也「お昼にしようか」

真保「今日、何しようか」

雅也「昨日のチーズカツ余ってたでしょ。卵

とじにして、カツ丼でもしようか」

真保「玉ねぎ、余ってたかな」

雅也「（冷蔵庫を見て）うん、ある。すぐ作

るわ」

真保「ありがと」

と、玄関の開閉音が聞こえる。

雅也「ん……？」

と、健次郎が帰宅する。

健次郎「ただいま」

真保「健、どうしたの？」

雅也「あれ、仕事は？ もう終わったの？」

健次郎「辞めてきた」

雅也「辞めた？」

真保「どういふこと？」

健次郎「辞めたものは、辞めたんだよ。（と
大きなため息をつくと）ああ、疲れたから
ちよつと寝るわ（と階段を上っていく）」

雅也「ねえ、仕事辞めてきたって、どういふ
こと？」

真保「いきなり辞めてきたなんて、健も何考
えてるんだか……」

雅也「これから、あいつどうするつもりなん
だろう」

険しい顔の雅也と真保。

つづく